

---

# 竜と夢達

砂漠の蜻蛉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜と夢達

### 【Nコード】

N1852K

### 【作者名】

砂漠の蜻蛉

### 【あらすじ】

緑に覆われた小国。そこで流行病が発生した。

一方、ルークは不思議な音楽を奏でるサーナイトを助け出す。

## 登場人物

### 登場人物

#### ルーク

色違いのフライゴン 用心棒をしている。シグラとは幼馴染。

#### シグラ

ボーマンダ 薬草師でまじない師見習い。森の中にある家に一人で住んでいる。

#### エミ

サーナイト 国境付近の森で会った。何かに狙われている。

#### サガル

キュウコン まじない師。この国で右に出る者はいない。年は150歳以上。

#### レス

デイグダ 便利屋を営んでいる。サラの兄的存在。シグラとは仲が良い。

#### サラ

サンド レスと一緒に便利屋を営んでいる。あまり喋らない。

**序章 流行病（前書き）**

取りあえず序章だけ。

## 序章 流行病

ガレン王国。大陸南西にある緑にあふれる王国だ。

畑仕事をする者もいれば、商売を楽しむ者もいる活気にもあふれる国だ。

そこで、ある流行病はやりやまいが流行っていた。

突然、何かに誘われるように眠り目を覚まさないという。

医師もなす術が無く首を捻るだけで治療法が全く見つからなかった。

そうこうしている内に病は国中に広まり、そこに住むポケモン達を怖がらせていた。

そして、今日も王都にある一軒の店でまた一人、何の前触れもなく倒れた。

## 1話 まじない(前書き)

こちらも更新。結構、速くできました。

## 1話 まじない

「何とかしてくれよ。俺はサラが居ないと……。」

「うーん。やっぱり、今はやっている病気なのか。」

床に敷かれた寝具を挟むようにディグダとボーマンダがいる。その寝具に包まっているのは、サンドだ。

「何とかして下さいよ。シグラさん。」

シグラと呼ばれたボーマンダが唸る。

「！この臭いは。」

「どうなんです。」

「レス、サガル師には診せたのか？」

「勿論っす。」

「何て？」

「それが何も言わないで帰っちゃったんすよ。だからシグラさんにこうやってお願いして……。シグラさん？」

何か考えていたシグラが呼ばれて反応する。

「どうしたんすか。ボーっとして。」

「いや、何でも無い。今からまじまいをかけてみる。外に出ていてくれ。」

「・・・分かりました。」

言われた通り、レスが部屋から出ていった。

「（このノワキの枝を焼いた臭い。恐らく呪いに近いものだな。）」

ノワキの実はその外見からまじない師が厄除けなどによく使う。

逆に、枝は厄を呼び込むとして、呪い関係に使われていた。

「師匠には止められているがやるしかない。」

シグラはサラの周りに结界を張り、横に座った。目を瞑り呪文を唱えながら体を前後に揺らしていく。

すると、だんだん体と感覚がずれてきた。

暫くして目を開けると、下に自分の姿が見えた。よく見ると白い糸のような物でつながっている。

「よし。」

サラの体を見ると同じように白い糸がのびている。違うのはその先に誰もいないという事だ。

シグラは糸を伝ってサラを追っていった。



糸を伝って、どんどん進んでいく。

初めは暗かった周りの景色がだんだんと明るくなっていく。

「ウツ！」

突然の強い光に目を伏せる。

目を少し開け様子を見て、完全に目を開けた。

「うわっ。」

ついつい感嘆の言葉が出てしまった。それだけ美しい世界だった。浅い池を袋のような花弁を持った花が埋め尽くしている。その花弁自体が白い光を放ち辺りを柔らかく包んでいる。

念のために、魂を強くするまじないをかけて着地する。足がついた所から、水が波紋を広げていく。

「糸を見失ってしまった。」

キヨロキヨロと辺りを見回して上を向いた。そこには、とても解けそうにない無数の糸が絡まりあっていた。この中から一本を探すのはまず不可能だ。

「仕方ない。また戻って……。」

飛び立とうとした瞬間、この世界に不吊り合いな黒い茨が首に巻き付き、地面に縛り付けられた。

「この世界で自由に行動できる魂があったか。丁度良い。」

低い悲しそうな声が聞こえた。

「お前の体、借りるぞ。」

額に何かの手が触れた瞬間、弾き飛ばされる感覚があった。

2話 国境の森にて（前書き）

やっとルークが出てきた。

## 2話 国境の森にて

国境の山脈を越えて、麓にある森のすぐ近くの川にルークは居た。太陽は既に沈み、星が眩い光を放っている。三日月が曲剣の様に弧をかき、水面に映っている。

今日は此処で野宿だ。ヒラバンで食糧は確保してあったのでそれで過ごすことにした。

「（はあ。結局この国に戻ってきてしまっただよな。）」

破れ難くて温かい油紙を体に引き寄せて顔を埋める。

「（まあ良いか、シグラの為にこんな厚い医学書を買ってきたんだ。）」

目を閉じて、眠ろうとする。

「！」

耳が物音を捕え飛び起きた。が、風で木々の葉が擦れる音しかない。

気のせいかと思っただが、一応耳を澄ましてみる。

「！ あそこか。」

今度は鮮明な悲鳴と共に、枝が折れる音を聞き取った。それと同時に、ルークは飛び出していた。

着いた場所は、森の中だと言うのに木々が全く生えていない、草原だった。草原と言うより原っぱと言った方が良くくらいの大きさだ。

「（こんな所が……。）」

一瞬立った疑問を振り払い、悲鳴の主を探す。それはすぐに見つかった。

草原が終わり、森が始まる一番手前の木の影に蹲っている。

「どうした。」

方に手を置くと、それはビクリと体を震わせて、此方を向いた。サーナイトだ、目から感じられる感情は恐怖だけだった。迂闊に近付き来すぎた。

「私は敵ではない。」

「本…当…ですか……。」

第一声が聞けたが、明らかに警戒している。

「ああ、だから安心してくれ。」

声を和らげて手を差し出すと、少し緊張が解れたのかゆっくりと手を伸ばしてルークの手に重ねた。

ルークはそれを引っぱって、怯える体を起こした。

「何があった。」

「その……。」

突然、言葉が途切れて顔が恐怖で引きつった。

「大丈夫か？」

「う、後ろ。」

振り向くと、何かの鋭い爪がすぐ目の前に迫ってきていた。

「なっ！」

とつさに、サーナイトを突き飛ばしてその上に被さるように身を伏せた。

爪は、背中を掠っただけで空振りに終わったようだ。

すぐさま起き上がり、首筋に平手を当てた。殆どはこれで意識を失う筈だ。

「！」

しかし、ふらつく様子もなく今度は逆の方の爪で攻撃してきた。寸の所で避け、今度は耳に平手を食らわして鼓膜を破った。

その隙にサーナイトを連れて、その場から逃げ出す。敵はすぐに飛んで追いかけてきた。

「チッ。背中に掴まれ。足を下ろすな。」

「わ、分かりました。」

サーナイトが乗ったことを確認して大地の力を使った。

普通、飛んでいる敵に地面技は効かないが、今は倒す事よりも逃げる事が最優先だ。

「（成功してくれよ。）」

ルークの足元から円を描くように低く操っていく。

円が出来たら、内側に向かって模様を描いていった。

サーナイトが悲鳴をあげた。

敵が、爪を上げ振り降ろそうとした。が、止まった。

そのまま自分たちを探すように辺りを見回していたが、諦めたようにどこかへ飛び去っていった。

「た、助かった。」

背中サーナイトがへなへなとしゃがみこんだ。

「フー。」

ルークもため息をついて地面に座る。

サガル師にまじないを教えてもらっておいて良かった。

地面には大地の力で陣が描かれている。これで、呪いによって動かされている奴の視界から消える事が出来るらしい。

「あ、ありがとうございます。何もお礼が出来ないですが……。」

「そんな物は要らないさ。私が勝手にやったんだから。」

「そうですね。あ、あのわたし行きますね。また襲われちゃうと、迷惑が。」

そう言って、サーナイトが立ち去ろうとする。

「待て。さっき襲われた奴を、そのまま行かせる訳にはいかない。少し行けば、友人の家がある。それに」

ルークはサーナイトの腕を指差す。さっき突き飛ばした時に怪我をしたようだ。

「その怪我の手当てをしなければ。」

サーナイトが腕を押え頷いた。

「私は、ルークだ。」

「え、エミです。」

「そうか、取りあえずここを離れよう。話はそこからだ。」

ルークはエミを自分の荷物が置いてある場所まで連れて戻った。



### 3話 音楽

荷物を持って森を歩く。木々が生い茂り月すら見えない。ここから襲われる心配はないだろう。

ルークは立ち止って、後ろにいるエミに向いた。

「で、何で襲われていたんだ。」

「全然、分かりません。」

「そうか。」

それ以上は何も言わなかった。質問しても分からない事を答えられる訳がない。また前を向いて歩き出す。

「あ、あの〜。」

水が湧き出ている所で、中身の無くなった水筒に水を入れていると、エミが遠慮がちに話しかけてきた。

「やっぱり、お礼させて下さい。」

またその話か。と思ってやり過ぎそうとした。

「あの、そういうのじゃなくて、音楽で。」

「音楽？」

音楽というのは、誰かが作った語り話か、鼻歌ぐらいしか聴いた

ことがない。

「ちょっと待って下さいね。」

そう言ってエミは自分の荷物をあさりだした。

「おい。」

「あつたあつた。」

そう言ってエミは竖琴を取り出し掲げて見せた。

「わたし、こう見えて色々なところで演奏して来たんですよ。偶に、すごく偉い方の所に呼ばれた事もありました。最近は、一ヶ月ほど前のバイロールの方ですかね。」

「お前、バイロールから歩いてきたのか。たった一ヶ月で？」

「ええ。」

これが本当だったら凄い。バイロールは、ガレンの北にある国だが、山脈がある為カトラル経由ではないといけない場所だ。そのルートだと最低でも二ヶ月はかかる。

「それは良いとして、お客さんは座ってないと駄目ですよ。」

エミがあまりにしつこいので、仕方なく近くの岩に座った。

「じゃあ、始めますね。」

エミは、豎琴の弦に指を掛けて弾いた。  
ポーンと良い音がして、音楽が始まった。

それは、新緑の春の森を想像させた。透き通った小川はキラキラと光り、心地良い風が木々の間を抜けていく感じだ。

「（良い音だが、この違和感は何だ？）」

さつきから森中が動いている感じがして、居心地が悪い。豎琴の音が木々の間を抜けて、そこから木の一本一本が歌っているような感覚に、自分一人だけ邪魔者が紛れ込んでいる様な気がする。

「どうかしましたか？」

エミが心配そうに覗き込んできた。

「いや、何でも無い。」

首を横に振って答える。

「もしかして、気に入らなかったと……か？」

「そんな事は無い。」

「そうですか？」

「それよりも寝た方が良い。今日はもう動けない。」

「寝るんですか……。」

「なぜそんな顔をする。」

「こんな話信じてくれるか分からないけど……。わたし夢が怖いんです。」

「はあ。」

「昔は、良かったんですけど、最近、同じ悪夢ばかり見るようになって、いつも『殺してやる!』って言う所で目が覚めるんです。」

困った。顔からしてその話は本当だ。だからといって寝ないのは体に負担がかかる。しかも、さっき襲われた疲労は大きいだろう。

「なら、これならどうだ。東の方のまじないだ。額に短剣を乗せて寝ると悪夢を見ないらしい。」

そう言っつて荷物から、兄に無理やり持たされた短剣を出した。

ルークは槍しか使えないから意味が無いといったのだが、何か役の立つことがある。と言われて仕方なく持ってきたものだ。それがいま役にたった。

「有難うございます。」

載せて目を瞑ったのはいいが、やはり、心配なのかなかなか眠ってはくれなかった。

しかし、よほど疲れていたのだろう。今は、眠りの中だ。

エミは悪夢といていたが、ルークにとっては先ほど起こった事が悪夢でしかない。一瞬だけ見えた敵の横顔は、自分が一番良く知っている。

「シゲラ、何故。」

伸ばした腕が空を掴んだ。

#### 4話 襲撃再び(前書き)

やっと書けた。これでこの話の山場を越えたぞ。たぶん。

#### 4話 襲撃再び

森の中に、広々とした空間があった。そこには、一軒の家がある。ルークは迷う事無くその家の戸を叩いた。

「シグラ。居るか。」

返事が無い。

「居ないのか。」

何度呼んでも返事が無い事に諦めて、街までおりて宿を探すことにした。

「エミ、何をしている。」

「何か変な音が聞こえたような……。」

エミが指差す方向には草むらがある。

「何も感じないが。」

自慢ではないが、自分ではかなり気配を探るのは得意な方だと思っている。この位の距離で音が聞こえたのならとつくに気付いていないはずだ。

しかしエミも引かない。

「絶対に何かいると思います。」

言いきった時、その草むらから竜の息吹がエミめがけて飛んできた。

「なに！」

大地に力で壁を作り、攻撃を防ぐ。竜の息吹を放ったボーマンダは、その壁を軽々飛び越えドラゴンクローをエミの目の前に打ち込んだ。

外れたのはルークがとっさにエミを後ろに突き飛ばしたからだ。突き飛ばした拍子にボーマンダの下に滑り込みアイアンテールを腹に打ち込む。

大抵はそれで気を失う。経験上これに耐えたポケモンはいない。

「クツ！」

敵は、顔のすぐ横にドラゴンクローをぶつけてきた。ルークは敵の下から滑り出し攻撃に構える。

しかし敵はルークを飛び越えて、エミに向かっていった。

「しまっ！」

エミはおそらく戦闘の経験が無い。敵に追いつくところの前、鼓膜を破った方の顔にアイアンテールをぶつけた。

「エミ！逃げろ！森へ逃げればたぶん見つからない。」

「でも……。」

「いいから！」



口調を強めて言い放つ。

突然、頭に衝撃が走る。

てっきりポーマンダはエミだけを狙っていると思っていたのが裏目に出たらしい。

ポーマンダは自分を倒さないとエミを捕まえられないと思ったらしい。

「クソッ！」

下げていた尾を再び跳ね上げて距離をとる。

「頭を下げる。」

後ろから声が聞こえた。誰かは分からないが従った方が良いと感じ頭を下げる。

下げたと同時にすぐ上を炎の筋が飛んでいき、ポーマンダに当たった。

ポーマンダは突然の攻撃に驚き飛び去っていった。

「おいルーク。何者じゃ、あいつは。」

目の前によく知っているキュウコンが姿を現した。

「サガル師。」

「ふん。命拾いしたな。」

顔を此方に向け、見下している様に赤い目を光らせた。

「まあ、良い。あやつが狙われていた事ぐらい見当が付くわい。」

エミを手招きして、勝手にシグラの家の中へ押し込む。

「あの馬鹿弟子め。簡単に術に掛かりおつて。ルーク。結界を張るから中に居ろ。」

そうやってサガル師は近くにあった棒に何か文字を書き家の四隅に立て、それに家を囲むように縄を張った。

「あやつに言っておけ。ここから絶対に出るなとな。」

「おい。ルーク兄さん。」

声のする方へ向くと、デイグダが全速力でこちらに向かって来ていた。頭には何かを乗せている。

「ああ、サガル師も。」

「おい！その縄を切るな！」

デイグダがそのまま縄を切る勢いで突っ込んできたのでサガル師が慌てて止めに入る。

「どうした？」

ルークの質問にデイグダが焦りながら話し出した。

「シグラが、シグラが、」

「あのへぼ弟子がどうしたんじゃ。」

「シグラが、おかしくなっちゃたんです！」

ルークとサガル師は顔を見合わせた。何を言いたいのか全く分からない。

仕方なくデイグダを中に招き入れた。

## 5 話 誓

「で、初めからちゃんと話せ。」

火を囲む形でサガル師とエミ、レスが場所を取りルークは壁にもたれる。

「まず、サラが最近流行っている、病気にかかってサガル師に見せたいんです。よね？」

「そうじゃ。」

レスの力ない肯定をサガル師が確かなものにする。

「でも、何もせずはどこかへ行くもんだから……オレ。」

「それで、あのへば弟子を呼んだって訳か。」

「あいつ……。」

ルークは心の中でため息を付いた。

シグラのことは昔からよく知っている。薬草とまじらないに目覚めた優しい竜だ。いつも自分のことは二の次で危ない橋を渡る。

「診てもらっていたら外へ出ろって言うもんだから、外で待っていたら、突然、窓から黒い影みたいな物が飛び出してきて。」

レスが言葉を切った。

「中を覗いたら、サラを残して誰も居なくなっちゃって。」

「ワシの所に来た、と。」

サガル師がゆっくりと立ち上がる。

「近頃流行っている病は、呪いで魂が抜けている。」

「何ですって!」

エミが驚いたように声を高める。

「戻す方法は無いんですか?」

「無い、訳ではない。が、かなり危険じゃ。サラの二の舞にじゃ。」

あのへば弟子は戻せるかどうか……。」

「戻せなかったら?」

「殺しても止めるしかない。」

「……。」

「おい。何処へ行く。」

ルークが扉に手を掛ける。

「シグラの奴が戻れずに殺す事になるなら、私は奴に首を差し出しますよ。」

外に出てサガル師の張った結界を越えない様に家の裏手に回る。

「シグラの奴。」

怪我しないで帰って来られると思うなよ。

## 5話 誓（後書き）

今回はかなり短めでした。

ルーク「書く気があるのか。」

も、勿論。

## 6話 別世界で（前書き）

シグラが久々登場！

シグラ「この頃出番が少ない気がするのは気のせいだよな。」

勿論、気のせい気のせい



## 6話 別世界で

思い瞼をつつすらと開ける。周りを確認したら目を開け、起き上がる。

「ここは……？」

目の前は、目の高さの何倍もある大きい花の茎、足元には水溜りがある。

上の方は暗いのにこの辺りが明るいのは花の一つ一つが光を放っているからだ。

「……綺麗だな。」

暫く見とれていたがハツとした。自分の体から伸びていた筈の糸が切られている。

たぶん、この世界に来て最初に襲われたときに切られたのだろう。魂はまじないを掛けておいたため乗っ取られると事は無かったが、体の方は勝手に使われているらしい。もしかしたら師匠は魂ごと操られていると思うているかもしれない。

だが戻りたくても、此方から戻る事はまず不可能だ。

「はあ。師匠の言いつけを守っておけば良かった。」

今更何を言っても無駄なので、とりあえずこの世界を調べる事にした。

そして分かった事は三つ。

ここは自分たちが住んでいる世界とは別別という事。

あの流行病にかかったポケモン達は、みんなここにいる事。  
そして、この世界で自由に動けるのはあの何者かと自分だけとい  
う事。

「……………」

何か見た事がある光景に自然に足が進んでいたらしい。シグラは  
ある花の前で立ち止まった。

「サラ！」

シグラが花に触れると、花卉が散って中からサラが出てきた。

「サラ。起きろ。」

「ん、シグラ……………さん？」

サラが薄眼を開けてシグラを見つめる。

「！ 何の声？」

ぼんやりと低い声が響く。

「大丈夫だ。」

サラとシグラの周りに霧が撒き始めた。

「この霧は俺が作ったまじないの防壁だ。外からは入れないし何も  
聞こえない。」

その言葉を聞いて少し安心したようだ。

「サラ、今から君を元に戻す。この糸が見えるか。」

「あれ、こんな物あったっけ？」

サラが不思議そうに自分から延びている白く光る糸を見つめる。

「魂の状態だと、見ようとしないと見えない物があるんだ。これがその一つ。サラ、戻ったら俺の言った事を師匠に伝えてくれ。」

「うん。」

シグラはサラに自分の考えと、この世界の事を伝えた。サラは何度も繰り返し忘れてならないようにする。

「サラ、これを伝えていけば戻れる。敵はどんな手を使ってでも連れ戻そうと思うが、絶対に帰りたい。という気持ちがあれば絶対に戻れる。この世界では気持ちの強さがすべてなんだ。だから振り返ったら二度と戻れなくなる。」

「シグラさんは？」

「俺はまだやる事がある。行くぞ。」

「うん。」

シグラはサラにまじないをかけると、霧を払いサラを送り出した。

「絶対に伝えてくれよ。」

唯一の望みが届く事を祈った。

7話 シグラの伝言(前書き)

この頃ここに何も書いてなかった。

ルーク「書いたとしても大したことは書けない。なら、書かないほうがいい。」

そんな言い方は無いだろ……。

## 7話 シグラの伝言

日付が変わり木々の間から日に光が差し込んできた。

ガレンの王都、ヒビンからは普段の活気が無く静まり返っている。皆、流行病が怖くて外にも出てこないらしい。

「ここまで静かなのは初めてだな。」

ルークは情報収集と同時に食料の調達をしようと街まで下りたが、この調子では両方達成できそうにない。

ふと、振りむいた時ガレンの円い屋根が特徴的な王宮が視界に入りリンクはどうしてるだろう。と一瞬考えがよぎったがすぐに振りはらった。

「（何を考えているんだ。もう終わった事。）」

ルークは、王宮から目をそらし、静まり返った街を再び歩き始める。

中央にある大通りに出たが、全ての店が閉め切られていて誰一人歩いていない。

「このままだと国が崩壊するな。」

「ボソツと恐ろしい事を。」

「事実でしょう。サガル師。」

目だけを後ろに向けて短く答える。

「全く、冷たい奴じゃ。」

「私の何処が冷たいんですか？」

「全部じゃ。」

サガル師が救いようのない事をサラツと言う。  
それに対してルークは薄笑みを浮かべた。

「だったら、直した方が良いですかね。」

「良いと言ってもお前は直さんじゃろ。」

「それもそうですね。」

「ルーク兄さん！」

さっきから感じていた気配の主が現れた。

「レス。如何した？」

「如何したもこうしたも無いんですよ。サラが、サラが目を開けたんです！」

「なに!?!」

サガル師の赤い目が光った。

「ルーク、わしを連れてさっさと戻らんかい！」

「分かりましたよ。」

ルークはサガル師を抱えると飛び立った。

シグラの家の戸を勢いよく開ける。

戸が端まで開き反動で外れそうになったが大丈夫なようだ。中を覗くと、エミがサラに水を飲ませているところだった。

「ルークさん？それにサガル師も？」

サラが不思議そうに二人を見つめる。

「サラ、何があつたんじゃ？」

「夢を見てた。」

「夢？どんな？」



「楽しい夢。あ、でも途中からだんだん怖い夢になっていって、怖いと思つたらシグラさんが……。」

「何だと！」

思わぬ所でシグラの名前が出て来た。

サガル師がさらに詰め寄る。

「何か言っていなかったか？」

「そういえば……。」

サラは夢の世界で聞いたというシグラの言葉を伝えた。

「それならば、シグラは魂ごと操られている訳ではないと言つ事じやな。それなら、何とかなるかも知れん。」

「本当ですか。」

何故かエミが嬉しそうに立ち上がる。

「サラの言つた場所にはわしに心当たりがある。」

「なら、私が。」

「どうせ、さっきのように抱えて行くのじゃろ。そんな事してみろ、シグラの奴が襲つて来たら如何する。」

「じゃあ、如何するんですか？」

「あれをやる。」

「あれ？ あれって何ですかルークさん。」

エミがルークの方を向く。

ルークは明らかに嫌そうな顔をしていた。

「本気で言っているんですか？」

「当たり前じゃ。」

サガル師はルークの意味を完全に無視して、ささっと準備に取り掛かってしまった。

## 8話 サガル師のまじない(前書き)

今回かなり短めです。

ルーク「此方は短い話が多いな。」

仕方ないでしょ。この分だと、此方が長引きそうなので南海の使者は少し休憩。

ランク「あんな中途半端で止めないでよ。」

あー。

## 8話 サガル師のまじない

サガル師が結界の外で陣を描いていく。暫くして出来上がった陣の中心にルークが嫌々連れて行かれるのをエミは結界の中で見ている。

「本当にやるんですか？」

ルークの声が聞こえてきた。強い人でも嫌な事はあるという事は分かっているが、何だか考えられない。

「お前以外に誰がやるんじや。腕を出せ。」

サガル師の独特の口調も一緒に聞こえてきた。

ルークが腕を出すとサガル師は、筆で手の甲から肘の辺りまで記号を書き込んだ。

「もう『嫌だ』とは言わせん。」

「もう言う気もありませんよ。早く終わらせて下さい。」

ルークが記号を書いた方の腕をサガル師に突き出した。

「五月蠅い奴じや。」

サガル師がルークの出した手の上に自分の手を重ねると、ぶつぶつと呪文を唱えた。

サガル師が触れた瞬間、閃光が走った。

「何やってるんですか？」

エミが横にいるレスに小声で尋ねた。

「さあ？」

レスは本当に分からないという仕草をした。  
外を見ると、サガル師の体がぐったりとしてルークに支えられて  
いる。

ルークはそれを丁重に寝かした。

「ルークさん？」

どうも、様子がおかしい。手を開いたり握ったり、羽を動かして  
みたりしている。

「こんなものかの。」

「えっ。ええー！」

エミは驚きを隠せずに、声を上げた。

「何いじゃ。」

エミは口をパクパクさせて何も喋れない。

「こいつの体を少し借りただけじゃ。本人は奥の方にいる。」

ルークの体を使っているサガル師は、得意げに二人を見下ろした。

「意外とはつきり見えるもんじゃな。赤は見難いと思っていたんじゃないが。」

サガル師が、辺りを見回す。

「そんな事より、行かなくて良いんですか。」

「言われなくても分かつとる。」

サガル師は、巻き上げた砂と一緒に飛び立った。

8話 サガル師のまじない(後書き)

サガル師、やりすぎ。

サガル「あの位、如何って事ないわ。」

## 9話 糸口(前書き)

久々の更新です。

あと、これと南海の使者めちやくちやく短くなりそう……。



## 9話 糸口

太陽がが森の木々の間から紅い光を放ち、大地に別れを告げている。逆に東からは夜の闇が天を覆い大地を這う生き物達を眠りへと誘い込もうとしていた。

ルークは、木々のすぐ上から一気に上昇した。そこには、ぼつかりと空いた穴に大量の水を流し込んだ様な湖があった。

ルークの体を借りているサガル師は、違和感に気が付いた。

湖全体と、その周辺の森、さらにはその上空までかかる壁が存在していた。

薄く、紫色に波が立っている。一目で呪術的なものと判断できた。

空中で止まり、壁に触れてみる。どうやら通り抜けても大丈夫なようだ。

「こんな目立つ物で、これだけの防御力とは、どんな術者じゃ。」

誰も聞いていない事をいいことに一人居てもどうせ言っが（このまじないをかけた術者に対して毒舌を並べた。

中に入ろうと、再び壁に手をかけた時だった。高く小さな音を耳が捉えた。

「何の音じゃ？」

今まで聴いた事のない音。振り返ってみる。視界に入ったのは、凄いい勢いですぐ近くまで迫っていた炎の塊だった。

「！ また出たか。」

羽を閉じて急降下したおかげで、直撃は免れたが、右の羽に軽い火傷をおった。

「くっ……。へぼ弟子だと思って甘く見てたわい。」

壁の突破は諦めて、シグラを相手にすることにした。  
まず、シグラの羽に座標を定る。

シグラが叫び声をあげる。片翼が凍りついた。  
その隙にサガル師はシグラの横を風のように通り抜けて行った。

シグラの片翼の氷は勿論、幻影なのでいつまた襲って来てもおかしく無い。今戦っても勝算が無いので、とにかく逃げるしかない。

暫く飛び続け、シグラの家の目の前へ、落ちるように着地する。

「ハッ」

自分の体に戻ったサガル師が目を開ける。

「サガル師、大丈夫ですか。」

レスが結界を越えてやって来る。

「大丈夫じゃ。」

「全く。無茶させて。」

ルークが、片膝を付いて起き上がる。

「ふん。分かっただろう。こつこついう術は術者にも、掛けられた側にも、相当負担が掛かるのじゃ。」

「そんな事、言われなくても分かっています。これから如何するんですか？」

「知らん。くそつ、クレセリアにでも来てもらえと言っのか。」

「クレセリア？」

エミが中から聞き返してきた。

「この国に居るんですか？」

「居るかもしれん。」

「わたし、クレセリアを探してたんです！」

エミが嬉しそくに声を上げる。

「行くなら連れて行って下さい。」

ルークはサガル師を見た。判断はサガル師にしか出来ない！

「付いて来れば良いじゃろ。」

一言。

「シグラは如何するんですか。私は、そんなに手が回せませんよ。」

ルークが、すかさず反論を出した。

この場合、シグラを引き付けておく役と、サガル師達を、術師から護る役。最低二人は欲しいところだ。

「話は聞かせて貰った。」

突然の声に振り向く。すると、近くの茂みから、隣国、シユロ王国の闇の部隊。獵犬のリーダー、アルが姿を現した。

「久し振りだな。」

「何故、此処に居る。」

「非番だ。」

単純な単語の序列だけで話が進んでいく。

「え」と、この方は？」

しびれをきらしのたエミが声を上げた。

「俺か。俺は、シユロの影の部隊、獵犬のリーダー、アルだ。」

アルが冷たくあしらう。

「しかし何故だ。」

「俺だってやりたい事はあるさ。」

アルが背を向ける。

「どうする。俺が入ると不都合があるのか。」

ある訳が無い。

「手伝ってくれ。」

後ろを向いているアルが微かに笑った。

10話 足止め(前書き)

アルが大活躍する、かも。

## 10話 足止め

翌日。手早く準備をし、出発する。

明るい時の方が動きやすい。と言うサガル師の説明からだ。半日は掛かるから着くのは夕方辺りだそうだ。

「さて、行くかの。」

サガル師がサツと結界を越える。

「おい、お前。」

アルがレスを顎でさす。

「さっさと帰ろ。」

「何で、」

「居て死んでも、自分の愚かさを悔むんだな。」

アルがきつい一言を飛ばす。レスは、分かったよ。と言ってサラを負ぶって街へ帰っていった。

「ここは、いい。さっさと行け。」

「じゃ、じゃあ……。」

エミが緊張した顔で結界を越えた。  
刹那。

ルークがエミを引つ張り、引寄せる。エミの頭のすぐ後ろを風の様にかが通り抜けて行った。

アルが空かさずそれを押さえ込む。

「行け。」

「任せた。」

アルが言う前にルーク達は裏にある森へ駆け込んだ。

「（どうするか。とりあえず動けなくしとくか。）」

一瞬、考えた際にシグラが、アルの下から抜け出しルーク達を追おうとした。

「待て！」

悪の波動を当てバランスを崩したところで地面に叩き付ける。アルはその上に飛び乗り、首と前足を押さえ付けた。

ここを押さえ付けられるれば動けなくなる。

このまま、押さえしておけば良い訳だ。

「！！」

だが、その希望は一瞬で潰えた。



あるの下にいるシグラが、動かせない筈の腕を無理やり持ち上げようとする。

ミシミシツと骨が軋む音が聞こえ反射的にシグラから離れる。

「痛みも感じないと言っていたのは、こういう意味か。」

追って行くかと思ったが、既にアルが、自分のする事の邪魔になる存在だと判断されたらしい。すぐに襲い掛かってきた。

アルは、薄笑みを浮かべた。

此方としては好都合だし、厄介な敵ほど戦いが面白くなる。

「悪の波動。」

もう一度悪の波動で迎え撃つ。

しかし、当たる前にシグラが消えた。

「ガ……ッ」

首に衝撃が走る。

「クソツ」

弾かれそうになるのを踏み止まり、右の翼にアイアンテールを喰らわせた。

骨がきれいに折れた音がした。これで、飛べない。

いつもなら、そこから仕留めるのだが、油断していた。

腹にシグラの尾の一撃をくらい、近くの木に頭からぶつかった。

「ガッ……」

アルはそのまま意識を失った。

シゲラは、アルが動かなくなった事が分かると、先に行った三人を追おうと翼を動かした。が、右の翼は動かない。

暫く、動かして見たが動かない事が分かると走って三人を追いかけ始めた。

10話 足止め（後書き）

ランク「いい加減こっちのも書いてよ。」

ああ、それは、五月になってからね。

もしかしたらもっと遅くなるかもしれないけど。

ランク「うつつ。僕の存在って……。」

11話 シゲラの決意（前書き）

ルーク「サブタイがまた微妙な。」

しょうがないでしょ！思い付かなかったんだから。

## 11話 シゲラの決意

「！」

森の中で、ルークは突然立ち止った。

この森は国有林で、本来入れる所ではない。だが、サガル師の恐ろしく広い人脈のおかげで難なく入る事が出来た。

高く伸びた木が天を隠して、秋だと言うのに少し湿っている。

「如何したんですか？」

背中にぶつかりそうになったエミが尋ねる。

「いや、何でも無い。」

間を入れずに答え、また邪魔な枝を切りながら足場を固めていく。

「サガル師、こっちで合ってるんでしょうね。」

「合っておる。心配するな。」

殿を勤めて<sup>しんがら</sup>いるサガル師の声が聞こえた。

二人とも、大丈夫だ。

止まったのは嫌な音が聴こえたからだ。二人には聴こえてないらしくこれが、天性の『耳』のせいである事が明らかになった。

これのおかげで何度も助かったのに、鬱陶しくて仕方が無い。

音を振り払う様に頭を振る。

「見えたぞ、あれじゃ。」

なるほど、サガル師が指す方に木々が無い場所がある。そこは、池と言うには大き過ぎ、湖と呼ぶには小さい。「ここが……。」

エミが口を開いた。

「クレセリアの……？」

「そうじゃ。さて、やるぞ。」

そう言って持って来た縄で結界を張る。

「おい、しっかり見張っておけ。あのへば弟子を引っ張り上げる。」

目を瞑って意識を集中させる。

ルークは周りの気配に警戒する。

水面に波が立ち、映った満月が揺れた。

花の一つ一つが光っている。現実で見た何者よりも綺麗だ。  
見ている、ハツとした。

「（駄目だ。これはこの世界に繋ぎ止めようとする罠だ。）」

花の根元まである水の上に寝転んでいたシグラが、起き上がる。  
眠い。  
魂だけでも眠くなるのだろうか。

「！ 師匠！？」

辺りを見回す。が、自分の体よりも、大きな花が立っている事以外何も見えない。

「空耳か……。」

諦めて、再び横になる。  
突然、激しい揺れが襲った。

「な、何だ！？」

地震だ。少しづつ、だが確実に、この世界は壊れ始めている。

「術者がもたないんだ。」

飛び起きて、安全な場所を探す。頭に、過ぎった嫌な考えを振り  
払い、なるべく、この世界の中心に近づく。

サガル師やルークが言っていた『甘さ』が分かった気がする。心  
の何処かで、あの二人に頼っていたのかもしれない。

なら。

「俺にだって、出来る事はあるはずだ。」

この捕らわれている魂を救うために、足を速めた。



12話 敵との接触(前書き)

いいサブタイが思いつかない……。

## 12話 敵との接触

シグラは走った。

一際目立つ花がこの世界の中心だと安易に予想がついたからだ。

「はあはあ、」

魂だけの場合、疲れる事は無い。だが、不安定な世界ではバランスが取れず、疲労が溜まる。

「ここか……。」

シグラの目の前には、今までの物よずっと背の高い花が花弁を散らしていた。

「おい！誰か、居ないのかー！」

声は無い。

当たり前か。初めにこの世界で会った誰かは『動ける魂があった』と言っていたから。他はあらかた眠ってでもいるのだろう。

「何でこんな事をするんだー！」

見えない敵に、声を上げる。

「……………」

返事は勿論無い。

いや、よく聞くと何か聞こえる。

「何だ、何て言っているんだ！」

「……。」

「何だつて？」

「……いで。」

弱々しい声が頭に響く。

「誰なんだ！何をしたいんだ！？」

「……。」

消えた。

気配ごと。

「何なんだ……。」

後ろを振り返る。

「あ、れ？」

来た時のように、花がある。が、何か違う。  
花の位置が僅かに違うような。

「まあ、良いか。」

とにかく、捕らわれている魂を、助け出す。

シゲラは、手近にある花から取り掛かった。

秋だと言うのに生暖かい風が吹き抜けた。

ルークは僅かな気配も逃さない様に意識を集中した。

「如何した？」

「エミが身動きした様な感じがした。」

「何かあったのか？」

「……。」

「おい。」

「答えないエミの肩を揺らす。」

「おい。」

「！ な、何だ。ルークさんか。クレセリアが居たんです。」

「何？」

エミが指した方を見る。

「何も見えないが。」

あるのは波が立っている水面があるだけだ。

「何ですか。あそこにほら、て、あれ？」

「何だ。」

「居なくなっちゃいました。」

「はあ。」

ルークは呆れて、また意識を集中させた。

「逃げる！」

茂みから飛び出して来たのはアルだ。  
見ると腹から黒っぽい血がダラダラと流れている。

「どつした?!」

アルを結界の中に引きずり込む。

「何があった。」

エミが持って来た布で傷口を押さえ、アルが顔を歪めた。

「しくじった。」

暫くの沈黙。

ルークは、顔に冷や汗をかいている事に気づき、呼吸を整えた。

「済まない……。」

沈黙を破ったのはアルだった。

「俺のミスだ。」

アルが血が止まったのを確認し、ふらつきながら立ち上がった。

「まだ、動ける。」

「分かった。」

簡単な言葉で話を終わらせルークは辺りの気配を探り始めた。

### 13話 敵の正体

森の中に隠れている気配を探る。

前回は分からなかったが、一度覚えれば追えない事は無い。

しかし、あのシユロの軍部最前線に立つアルにあそこまで傷を負わせた。いまのシグラは、本来の力以上だ。気を抜いたら、

「死ぬ。」

そんな事になったら、シグラを連れ戻す事が出来なくなる。それだけは、絶対に阻止したい。

「くそつ。何処だ。」

全身の神経を逆立ててシグラを探した。

空を切る音と、ルークのドラゴンクローの斬激の音が重なった。

「クツ。」

重い。さすがは、アルを傷付けただけある。

ルークは、力ずくで弾き返すと、横に刃を滑らせた。シグラは、後ろに跳び下がりそれを避ける。ルークはすかさず前に跳び出し、切りかかる。

斬激が暗い森の中で、響きあった。

「やってるな。」

アルは、ルークが飛び込んでいた茂みを見て呟いた。

「お前は、何で来た。」

「わたし？」

向こう岸を見ていたエミが振り返る。クレセリアが出たと言っていた場所だ。

「以外、誰がいる。」

「何か。何か出来ないかなって。」

アルは考えられないという様に頭を下げた。理解できない。あいつもそうだが、恐怖というものが無いのか。こいつ等には。

「俺はな、口だけの奴は嫌いだ。」

「口だけだなんて……。」

「……。」

二人の間に見えない壁が出来た。相手に自分の事を悟らせない。癖でやってしまう。



「あつ。」

エミの反応に、アルは顔を上げた。

「声が、」

「声？」

何も聴こえないし、特に変わったところはない。

「おい。」

アルが引き止めるのも聞かずに、エミは自分の荷物をひっくり返し何かを掴むと、結界を越えて湖の畔に立った。

またか。

シグラは、何人か元の世界へ戻そうと試みているが、サラの時の様に上手くいかない。

この世界自体の力もそうだが、その前にシグラの力自体がかなり

減っている。今までこんなに長い時間、体を離れていた事はなかったから想像を越す疲れが出ていた。

「こんなに疲れるものなのか。これじゃあ連れて行けない。」

負の感情が頭を駆け巡る。

「……………」

なす術が無くしゃがみこんだシグラの頭に弱い息が掛かった。

「！」

飛び上がって後ろを振り向いた。

「君は……………」

シグラの後ろに居たのは、黒い体に、頭には、白く靡く物。ダイクライだった。

### 13話 敵の正体（後書き）

あと、4話くらいで終わらせたいと思います。

## 14話 クレセリアの泉

「おい。」

アルは、傷付いた腹を気遣いながら畔に立つエミに声をかけた。

「いい加減に……。おい。」

エミが立っている目の前水面、そこに波がたった。

「？何が……。」

揺れた水の上に三日月型の頭を持ち、ピンクに光る尾を持ったクレセリアが浮いていた。

「ボクを呼んだのは、キミ？」

クレセリアは、アルとエミを見て、それだけ言った。

「まさか……。」

流石のアルでも驚きは隠せない。

噂話だけで実際に見たと言う話は聞いた事が無い。アル自身、クレセリアの存在は端から否定していた。

「一体、何をした。」

エミを問い詰めるが、答えは返って来ない。

「ねえ。キミ達の感想なんてどうでも良いけど、ボクに何の用？無駄に呼ばれたって言うなら怒るけど。良い？」

アルの真上からクレセリアの声が聞こえた。

「貴女って、悪夢から目を覚まさせる力が有るんでしょ。わたし達に力を貸して。」

エミがクレセリアに頼みこむ。

「良いけど……。」

意外とあっさり同意した。

だが、最後の『けど』が気になる。

「今日、喉の調子が悪いんだよね。」

アルは喉まで上がってきた怒りを、何とか腹に押し戻した。

「どうすれば良いの？」

「ん〜。じゃあ、それで旋律やってよ。そうすれば歌えるかも。」

クレセリアは、エミの持つ堅琴の事を言ったらしい。見せると頷いた。

「良いわ。」

「ふふつ。この子と違って物分かりが良いのね。ボク、キミみたいな子、好きだよ。」

クレセリアが嬉しそうに笑った。

シグラは、ゆっくりと後ずさった。

目に見えない力が、体を突き動かそうとするのを抑える。

暫く下がると尾が花の硬く太い茎にあたり、これ以上逃げる事が出来ない事を告げた。

「ダークライ。何が……したいんだ。」

「……何も。」

シグラの問いに、小さく答える。

「じゃあ、何でこんな事を?」

「……。」

返事が返って来ない。  
それ以前に、ダークライの体が、影に消えてしまった。

## 15話 目覚め

ルークは、近くの木に飛び移った。

シグラが相手だと浅めな攻撃しか出来ずに、さっき目の上と二の腕辺りに傷を作った。

そのおかげで右目が少し霞む。

だが、嬉しい出来事も起こった。さっきから聴こえ出した歌のおかげか、シグラの動きが少し遅れるようになった。

今を逃す訳にはいかない。

「仕方ない。」

ルークは、近くにあつた枝を折り、投げた。

枝は、シグラの上を通り越し反対側の落ち葉で物音を立てた。

「シグラ、済まない。」

その時出来た隙に、ルークは鋭くしたドラゴンクローでシグラの両後足と、左前足の腱を切裂いた。



声が聞こえる。

これは……歌？

ほぼ崩れ掛けた世界に、希望を持たせる様な歌が聞こえてくる。

「！ やったんだ。」

見ると、向こうの方から花卉が崩れていき、その後を金色の砂が広がっていく。

捕らわれていた魂が、糸を伝って元の居場所へ帰っていく。

それは、生きている事を嬉しがる様に輝いていた。

「さて、帰るか。」

言ってみたものの、シグラには帰る術は無い。

「……くそっ。」

シグラは、砂になった地面に手を叩き付けた。

頬を温かい風が撫せたが、顔を上げる事が出来なかった。

「師匠。申し訳ありません……。」

足元から黒い茨が伸びて動きを封じていく。

驚いて、振り返るとダークライが此方を見ていた。

「ダークライ。」

見るからにダークライの力は弱くなっているが、シグラは抵抗しなかった。が

「この、お人好し馬鹿が。」

声と同時に、茨が炎で断ち切られる。

「敵に身を委ねるとは。」

「師匠？」

「さつさと行くぞ。この阿呆でお人よしで人に心配ばかり掛ける大馬鹿が。」

「ですが、俺は、もう……。」

「ワシを誰だと思ってる。サガル。この国で一番のまじない師じゃ。」

そう言って、サガル師は後ろを向いた。

「ダークライ。」

シグラは、糸が切れた様に横たわっているダークライに声をかけた。

「俺にはちゃんと、声は届いたよ。何時でも歓迎するぞ。」

「ダークライの目が、嬉しそうになったのが分かった。」

「おい、さっさとしろ。」

「今、行きます。」

もう一度振り返った時にはダークライは居なくなっていた。

## 最終話 秋の風

よその夜、エミは夢を見た。  
以前まで見ていた悪夢はきれいさっぱり見なくなった。だからやっと安心して眠れる。

「エミ。お〜い。起きてよ。」

夢の中で、誰かが呼ぶ。

「起きないと、サイコカッター喰らわせちゃうよ。」

耳元で、そんな事を突然言われたのでエミは飛び起きた。勿論、現実ではなく夢の中で。

「やつ。」

軽い挨拶をするしたのはクレセリアだった。

「……何で？ 貴女が居るの？」

「夢の中はボクとダークライの世界だよ。」

クレセリアは簡単な説明をして、話に入った。

「流石だね〜。エミ。やっぱり、ボクの眼は正しかったんだね。」

「何、言ってるんですか？」

エミの言葉にクレセリアは少し驚いた様な仕草を見せた。

「まさか、これが全部偶然だと思ってるわけ？ もっと頭が良いと思ってるんだけど、やっぱり寝過ぎてると馬鹿なのかな？」

「む、どういう意味です。」

「えー、まず、君の使ってる楽器だけど。実はあれボクが送った。」

クレセリアはエミを無視して勝手に話を進めた。

「！ あ、あれは、わたしが作った物です！ 貰ったものじゃありません。」

「そうだけど、人を引き付ける力をあげた。」

エミが黙る。

「でも、そんなの要らなかつたね。思っていたより優秀だったから。さて、これでキミの役目は終わった。もうあんな夢は見ないよ。じゃあね。」

それを最後に、クレセリアは遠ざかって消えてしまった。

ルークとシグラは、近くにある草原に来ていた。

そこでは、既に近くの子供達が走り回って遊んでいる。

ガレン王国は、あれだけの事があつたにも拘らず、一週間程で何時もと同じ位の活気を取り戻した。

「危険な事に片足を踏み込むな。」

ルークが近くの木に寄り掛かって呟いた。

シグラはその近くにしゃがみこむ。

体中に包帯を巻いてある上に、殆どの脚の腱を切られたので、補助無しでは動けない。

「片足どころか、巻き込まれたけどな。」

笑いながら答えると、ルークから「まったく」と聞こえてきた。

「そういえば、アルは何処へ行ったんだ？礼を言いたかったんだけど。」

記憶の無い間の一部始終は、全てサガル師から聞いた。

「奴なら、」

ルークが西の国境の方を指差す。

「帰った。これで貸し借りは無しだと。」

ルークとアルは余り仲が良くない。これ以上は、多分、何も聞いてないだろう。

「じゃあ、エミは？」

「シグラさ〜ん。」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえてきた。

「如何ですか？ 腕と脚。」

エミはルークを見ながら聞いてきたので、ルークが申し訳無さそうに目を背けた。

「ああ、もう大分良いよ。」

「良かった。もし何かあったら如何しようかと……。あ！ わたし、

また旅に戻ります。シグラさんの料理、今度教えて下さいね。」

エミはそう言い残して行ってしまった。

秋の空に、涼しい風が吹き抜けた。



最終話 秋の風（後書き）

ルーク「終わったな。」

うん。終わった。と言うわけで次回からは南海の使者の方を更新していきます。

六月に終われば良いな。  
では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1852k/>

---

竜と夢達

2010年12月10日02時03分発行